

國學院大學學術情報リポジトリ

Is The Structure of "Iki" of Shūzō Kuki a Book of Aesthetics or Ethics?

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Fujino, Hiroshi メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000762 |

『「いき」の構造』は倫理学の書か、美学の書か

藤野 寛

宮野真生子は論考「日常・間柄・偶然」の中で、九鬼周造と和辻哲郎を鮮やかに対照している。

「九鬼周造と和辻哲郎は、東京帝国大学の同級生であり、ともに一時期京都帝国大学で同僚として働いた。大きくみれば、二人とも京都学派の一員であるが、西田・田辺らの哲学とは少し距離がある。そして、九鬼と田辺の思想はしばしば対照的なものとして捉えられてきた。かたや非日常の偶然性を論理的に分析し、かたや日常の事実から間柄を生きる倫理を語る。生の不安定性を見つめる九鬼と、人間社会の安定性の基

盤を探る和辻。偶然の出会いの刹那に永遠の今を見る九鬼を「垂直の思考」と呼び、信頼を社会の基本として他者との共同性から論を始める和辻を「水平の思考」と呼ぶこともできるだろう。じつさいの生活でも、結婚生活に失敗し、「いき」な世界に遊んだ九鬼と、恋愛で結ばれた夫婦の「二人共同体」を生きた和辻は、鮮やかなコントラストをなしている。」

ただし、宮野はそこから「彼らの思想は相補的なものと読まれるべきものだ」（90頁）という方向に議論を展開していく。

「しかし、非日常／偶然／出会いの哲学と、日常／間柄／共同性の倫理学は背反する立場ではない。私たちは出会いだけを繰り返して生きるのでも、安定した日常だけを生きるのでもない。日常のなかに出会いはあり、起こった出会いは日常へと繰り返されていく。どんな非日常も日常になっていくし、一方で日常の安定があるからこそ非日常が強い輝きを放つ。」
(同90頁)

宮野によるこの対照化に触れて、けれども、私の中では、尋常でないという九鬼の思考の側にこそ強く振り子が振られることになった——とりわけ、和辻の思考の当たり前さ、凡常さとの際立つ対比において。そして、その点は、九鬼の言論界へのデビュー作となった『いき』の構造』において既に、いやそこですことりわけくつきりと浮かび上がっている。九鬼周造の思考は異常であると言わねばならないが、その点があからさまになるのはとりわけその倫理学においてである。そして、『いき』の構造』は九鬼の——美学ではなく——倫理学の著作である。それを美学の著作として解することは、この書の異常さを後景に追いやり、人畜無害化する結果につながり、のみならず、的をはずしている。この見通しのもとに『いき』の構造』を異常な倫

理学の書として読み取ること、それが以下の論述の目的となる。

【1】 「いき」は「美的概念」か？

論考「恋愛・いき・ニヒリズム」を宮野は次のように無造作に書き起こす

「さて、「粹」は江戸時代の遊郭において成立した美的概念であり⁽²⁾」

「美的概念」とはどういうことか。「的」という漢字は何を意味するのか。例えば「理想的」であれば、理想「という性質を具える」という意味だろう。「主観的」もまたそのように解することが誤りではないだろうが、そこからさらに主観「に由来する」という方向に具体化して理解することも可能だろう。「カント的」の場合、「いかにも」カント「らしい」ぐらいの意味か。

さて、美的概念だが、これは美という性質を具える概念、という意味ではありえない。概念が美しくなることはない。美に関係する、という意味で、宮野はおそらくこの四文字熟語を書き記していると思われる。あるいは、美学に関わる、という意味で。

まさにその意味でこそ、しかし、九鬼は「いき」を美的概念とは捉えていない。「いき」概念を構成する三つの属性の「媚態」「意気地」「諦め」を見るだけで、その点は明らかだ。いずれも、他者に向けられる精神の姿勢の表現である。その限りで、いずれも、倫理的概念である。九鬼の規定に従えば、「媚態」とは「一元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性ととの間に可能的関係を構成する二元的態度である」(17)³、「意気地」とは「媚態でありながらなお異性に対して一種の反抗を示す強みをもった意識」(18)であり、「諦め」は「運命に対する知見に基づいて執着を離脱した無関心」(19)である。この三つの規定のどこに「美的」観点が入り込んでいるというのか。

つまり、「いき」を—美的趣味の問題ではなく—徹頭徹尾「恋愛」論の中に奪い返そうと試みる宮野ですら、「いき」を美学の言葉と見なす定説になお囚われていることになる。

もちろん、そこには無理もないと言うしかない事情がないわけではない。2022年の現在、「いき」という言葉は、ほぼ「いきな着こなし」という風に、美的表現においてしか用いられない、と言って言い過ぎではないだろう。「美的(感性的)」概念としての「いき」、趣味判断の言葉としての「いき」である。

けれども、九鬼が1930年に試みているのは、それとは対

照的に、「いき」を倫理的概念として提出すること以外ではないのだ。

そして、そのように思つて読めば、第3章の「いきの外延的構造」での論述は、「いき」を、類似のそれこそ美的概念—例えば「上品」や「地味」—と慎重に差異化する試み以外の何もでもないことが分かる。象徴的なのは、例えば「洗練」—異論の余地なく、美的な概念だ—が、「序説」においては「この語は「いき」の徴表の一をなすものである」(12)と認められており、一瞬、「いき」の本質的属性であるかのように話題にされるのだが、しかし、本論においては一切顧慮されることがなく、「いき」の概念規定としても採用されない事実である。

これもまた、「洗練」が「美的概念」であり、それに対して「いき」とっては美的属性が副次的でしかないからだ、と推測せざるを得ない。

【2】倫理的特性としての「いき」

概念規定から見れば、『いき』の構造』は、歴然と、倫理学の書である。「媚び」にしても「意気地」にしても「諦め」にしても、いずれも、ある人間が人間関係において他者に対して探る心の姿勢、つまりは倫理的姿勢を表現するもの以外ではな

い。そして、その心の姿勢は行為において表現されるのであり、行為に関わる。

ただし、その際、その行為は、他者（相手）の—理性的思考—ではなく—感性（的知覚）に訴えかけようとするので、美的（ästhetisch）構成要素を含むことともなりうる。つまり、倫理的行為が美的特性を帯びることがありうるのだ。「いき」な心の姿勢は、それが身体を介して表現される場合には、つまりその客観的表現においては、美的（感性的）特性を帯びうる。しかも、その特性は九鬼によって肯定的に評価されている。

だから、「いき」が美的表現として分析されることにもなるわけだが、それは、あくまでも、倫理的行為が示す美的表現である。つまり、「意気地」や「諦念」という姿勢が「美しい」と感じ取られることはありうる、ということではある。そして、われわれは往々にして、倫理的性質に安易にも「美しい」という形容詞を付してしまう。「美しい魂」はその代表例だろうが、それはしかし、せいぜいでも副次的に付け加わり得る属性に過ぎない。（それに比して、カントが挙げる倫理的行為—嘘をつかない、とか、困っている人を見たら助ける、とか—にあつては、そういう美的構成要素は含まれないのではないか。）

それにはとどまらない。九鬼によって、「いき」は人間の行為、

身体表現を超えて、人間が産み出す芸術表現の中にも見出されうるのであり、さらには自然現象の中にも確認されることになる。ただし、その場合には、「いき」の属性のうち、もっぱら「二元性」に焦点をあてる議論になっていく。「心（意識）」の属性ではないのであつてみれば、それも当然というしかないだろう。

【3】 二元的・動的・可能性としての「媚態」

『「いき」の構造』は、倫理学と美学が奇妙な仕方でも混在する書物である。ここでは、二つの異なる分析が強引に合体させられている。「いき」についての倫理学的分析と、美学的分析とが。ただし、より生彩、あるいは異彩を放っているのは前者である。両者（倫理学的分析と美学的分析）の間に共有される論点があることは確かだとしても、「いき」を構成する三つの意味成分（媚態・意気地・諦め）が両者において同等に作動しているとは言い難い。その点がとりわけ顕著なのは、第一の意味成分「媚態」に関してである。

媚態とは何か。再度引用する。

「二元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性と

「間に可能的關係を構成する二元的態度である」(17)

不必要に晦渋なこの哲学的表現を普通の言葉づかいに言い換えれば、「二人の人間が異性の存在を意識し、その人との間に仲良くなる可能性を思い描き、その実現のために頑張つて、二人の人間の間構成される態度・振舞いである」というところだろうか(ただし今日であれば、その際「異性」でなければならぬ理由はない、と言われるだろう)。ここでは「可能的」という性質と「二元的」という性質が不可欠であり、だから九鬼も「この二元的可能性は媚態の原本的存在規定であつて」(17)と念を押す。その際重要なのは、媚態が可能性を「原本的存在規定」とする点である。言い換えれば、その可能性は「現実性」となつてはならないのだ。だからこそ、こう言われる。

「異性が完全なる合同をとげて緊張性を失う場合には媚態は自ずから消滅する。媚態は異性の征服を仮想的目的とし、目的の実現とともに消滅の運命を持ったものである(…)」
故に、二元的關係を持続せしむること、すなわち可能性を可能性として擁護することは、媚態の本領であり(…)媚態の強度は異性間の距離の接近するに従つて減少するものではな

い。距離の接近はかえつて媚態の強度を増す。(…)媚態の要は、距離を出来得る限り接近せしめつつ、距離の差が極限に達せざることである。可能性としての媚態は、実に動的可能性として可能である。(…)けだし、媚態とは、その完全なる形においては、異性間の二元的、動的可能性が可能性のままに絶対化されたものでなければならぬ」(17-18)

恋愛経験にあつてごく当たり前の、誰にも思い当たるふしのあることが小難しく言い表わされているだけ、とも言えるが、にもかかわらずしつこく引用したのは、ここに言われる「動的」という契機を際立たせるためである。それというのも、「いき」の「客観的表現」(41)にあつては、自然的表現であれ、芸術的表現であれ、この動的性格、そしてそこから生じる「緊張性」が影が薄くならずにはすまないからである。例えば、「いき」を最もよく表わす模様として平行線が挙げられるのだが、「永遠に動きつつ永遠に交わらざる平行線は、二元性の最も純粋なる視覚的客観化である」(53)という点は、「二元性」に限つてみればそう言えるとしても、そこには「合同の可能性」は存在せず、従つて、「緊張性」も存在し得ない。つまり、編模様は——縦縞であれ横縞であれ——「媚態」の「客観的表現」ではあり

えないはずなのだ。色彩の場合に、この動的可能性としての二元性という性質を確認することがますます容易でなくなることは、一目瞭然だろう。

媚態としての「いき」が成立するためには、二元性があるだけでは十分ではない。そこには動的緊張が孕まれていなければならぬのであり、その動的緊張を可能にするものこそ「合同」への、「二元性」への志向以外の何ものでもない。「一元性」故の幸いと弛緩に墮するのでもないが、「放縦なる二元性の措定」(43)もまた斥けられる、というのが「媚態Ⅱいき」の「いき」たる所以なのだ。「異性への方向をほのかに暗示する」必要があるのだとしても、そのほのかな暗示には、「方向」が、「運動」が、伴っていなければならないのだ。

倫理の問題として考えられるならほとんど自明のこのこと(可能性としての二元性)は、美的表現の問題とされるとき、容易に論証できることではないだろう。実際、『いき』の構造』もそれに成功しているとは言い難い。

【4】趣味と「いき」

「いき」が本来、美学の問題ではなく、倫理の問題として浮上してくることは、「いき」を他の類似する性質と比較する「第

三章「いき」の外延的構造」の論述からも確認される。例えば、「上品」というのは確かに「人間の趣味そのものの性質を表明する」言葉であり、趣味判断、つまりは美的判断に関わるものである。もちろん、「いき」も趣味と無関係ではない。それどころか「趣味の卓越」としても理解されうる。その上で、しかし、「上品」とは次のように差異化されるのである。

「いき」と上品との関係は、一方に趣味の卓越という意味で有価的であるという共通点を有し、他方に媚態の有無という差異点を有するものと考えられる」(28)

つまり、趣味の卓越という美的価値を、「いき」もまたなるほど確かに(「上品」と共に)備えるのではあるが、それはあくまでも副次的属性性としてであって、本質的属性性としてではない。「人間の趣味そのものの性質を表明する」(27)「上品」と下品」とはその点で決定的に異なるのである。

「趣味」という言葉が第二章「本書の白眉だ」には一度も使われない事実は注目に値する。「趣味」という言葉が頻繁に現われるのは、ようやく第四章になってからに過ぎない。

【5】ジェンダー論としての『いき』の構造』

『いき』の構造』が倫理学の著作であることに起因して、それがすぐれてジェンダー論的著作でもある点にはもつと光が当てられてよいと思われる。それも二つの意味において。第一に、「いき」という問題が起こるのが「性関係」であるという点において。第二に、「いき」がもつばら女性に帰せられる属性と捉えられている点において。

第一の論点は、「いき」を例えば「上品」や「派手」と対比する次のような指摘において確認される。

「上品」および「派手」の属するものは人性的一般存在であり、「いき」および「渋味」の属するものは異性的特殊存在である」(26)

ここでは「人間性一般」と「性的関係」が対比されている。そして「いき」は後者に帰せられている。既に確認したように、この特殊性を「異性」に限定して考える必要は(今では)ない。同性との間にも「媚態」が成立しうることは明らかであり、本質要件は、二人の間からなる他者との性的関係における二元性という点にある。

第二に、この二元的関係は、遊郭という「異性間の通路として設けられている特殊な社会」(19)「異性的特殊性の公共圏」

(32)に成立するものであり、そこに生きるのが女性のみであることから、その結果、(倫理の問題としての)「いき」が女性のみに帰せられることが必然となる。

しかし、美の問題として捉えるのであれば、本来「いきな男」がいても少しも不思議ではないはずなのだ。ところが、現実には九鬼が挙げる例は「湯上り姿」(43)であれ、「薄化粧」(46)であれ、「抜き衣紋」(47)であれ、どれも女性にしか帰せられない例ばかりである。まるで、「いき」は女性にしか可能でない、と九鬼は考えているかのようであり、実際そう考えていると見ざるをえない。『いき』の構造』は、意図してのことかとはともかく、女性論なのだ。

九鬼は、「いき」の具体的実現を、もつばら女性のもとに見出している。文化文政の江戸の「特殊社会」に出生の場を持ちつつ、「いき」はもつばら女性によって具現されている。自らをそういう女性にアイデンティファイしつつ、九鬼はこの著作の思索を進めていたに違いない。

『いき』の構造』が本来、日本民族論ではなく、女性論であることを感じ取っていたであろう坂部恵は書いている。

「これほどまでに明確に女声を語りの人称とする「たをやめぶり」(お望みならば「両性具有」と言いかえてもよい)の哲学者ないし哲学は、一貫して「ますらをぶり」が主流を占めた時代思潮の影響下にある明治以降の日本の哲学界においては、例外中の例外である。」

ところが、九鬼は、その特殊の論理としてのジェンダー論から「惜しいことに——日本民族の特性の表出という方向への一般化に転じてしまう。

【6】 日本文化の特性としての「いき」?

「いき」が日本文化に一般的な特性である、と九鬼は主張する。その際の根拠として挙げられるのは、日本語が「いき」という言葉を持っている、しかも日本語だけがこの言葉を持っているという事実である。

しかし、この事実と反する事実もまた数多く存在するのであり、それは九鬼自身も強調している事実である。ことは歴史的時間に関わるとともに、地理的空間に関わる。

九鬼は「いき」が文化文政の江戸の遊郭に生きる女性に特有の姿勢であったことを様々な実例を挙げて力説している。その

際、時間的に、文化文政は元禄と対比され、地理的に、江戸は上方と対比される。「野暮と化物とは箱根より東に住まぬ」(18)のだし、「文化文政の美人の典型も元禄美人に対して特にこの点(姿がほっそりして柳腰であることが、「いき」の客観的表現の一と考え得る点)を主張した」(44)、「元禄の理想の豊麗な丸顔に対して、文化文政が細面の瀟洒を善しとしたこと」(44-45)、「江戸時代には京阪の女は妖艶な厚化粧を施したが、江戸でそれを野暮と卑しんだ。江戸の遊女や芸者が「婀娜」といつて貴んだのも薄化粧のことである」(46)、「西鶴のいわゆる「十二色のたたみ帯、だんだら染、友禅染など元禄時代に起こったものに見られるようなあまり雑多な色取を持つことは「いき」ではない」(60)、「紫のうちでは赤勝の京紫よりも、青勝の江戸紫の方が「いき」と看做される」(62)——例を挙げればきりが無い。

つまり、九鬼が際立たせようとする「いき」の文化が、日本社会全体に、しかも歴史を通して共有されていたわけではないのであり、その事実を、「いき」の特性を浮き彫りにしようとするほど力説しなければならぬ論理に、九鬼自身が陥ってしまったのだ。

その際、注目すべきは、この江戸の文化文政と「いき」を関

係づける議論が、ほぼ第四章以降の、「いき」の客観的表現をめぐる議論、つまりは美学的分析の中にか現われない事実である。「いき」を日本民族の特異性として高々と宣言する「序説」の表明と、第四章以降の美学的分析はその意味でも、整合性を欠くのである。

にもかかわらず、『いき』の構造』は、日本民族の精神の美的表現を分析し、顕彰し、(西洋) 世界に主張する書として受け止められ、崇め奉られてきた。

どうして、そのような誤解が広く受け入れられ、流布するところとなったのか。もちろん、一つの大きな理由は、九鬼の論述そのものの内にその傾向が見出されることだ。とりわけ、第4章、第5章において九鬼の論述はあからさまに「いき」の美的表現の闡明に傾斜する。注意すべきことに、それは準備稿「いき」の本質』にはなく、『思想』発表版において後から付け加えられた論述である点だ。

なぜ、九鬼の論述がその方向に傾いたのか、を考えることはそれほど難しいことではない。この書の日本文化論という特性がそうさせたのだ。この書が、日本文化の—西洋文化に対する—自己主張という特性を持つことは看過不可能な事実である。

これは、外国に留学し、あるいは研究生活をする機会を持つこ

とになった学者、思想家が判で押ししたように身を置く(陥る)こととなる精神状況である。彼(女)は、西洋に対して日本を代表してその文化を能う限り肯定的にプレゼンテーションせねばという心境に囚われずにはすまなくなる。その時、江戸時代、それも文化文政時代の江戸という街の「特殊社会」に花咲いた特殊な、あまりに特殊な「いき」な心意気であるはずのものが肯定的にプレゼンテーションされるといふ論旨が「倫理的な姿勢」としては、それは大いに問題含みなもので—むしろ後景に退き、美的な特性をこそその強みとする日本文化の本質的特性として打ち出されることになったとしても、その心の傾斜は十分に追遂行可能なものである。

だからといって、しかし、その展開が『いき』の構造』のもともとの論旨からすればそれからの逸脱であることは、否定しようがない。つまり、この書は、あくまでも倫理学の書なのであり、それも、「不倫の場」という「特殊社会」において展開された心意気を顕彰しようとする、極めて問題含みの、挑発的な倫理学の書、なのである。そして、その書が、もし、今日なお読み継がれる価値のある古典でありうるとすれば、それは日本文化の美的独自性の顕彰の書などとしてではなく、マジョリテイにとつては「不倫」でしかない倫理的姿勢の顕彰、とい

うパラドキシカルな論点を通してである、と主張せずにはいられない。「『いき』の構造」は、言うなれば、「不倫の倫理」という逆説の書なのだ。

〔7〕 カノン（規準）からの逸脱

九鬼が「いき」の概念規定の中には採用しないけれども、実は素通りされてはならない契機が、この書の論述全体の中で重要な役割を演じている。それが「カノン（規準）からの逸脱」である。この契機のせいで、「『いき』の構造」の論述は、どんな深く、美学の書の相貌を呈することともなる。ただし、それは、規準・正典からの逸脱の美学、なのではあるけれども。その際、規準・正典を差し出すのは、もちろん、西洋の美学だ。だから、「『いき』の構造」は、東洋人が、西洋の美学の正典に――弱々しくはあるけれども――反旗を翻そうと試みる書になっている。

ただし、それと同時に、そのことは、「遊郭文化」の言挙げの書である本書が、お行儀の良い結婚生活（夫婦関係）文化へと反旗を翻す書である事実にも呼応しているのだ。九鬼は、美的にも、そして倫理的にも正系からはずれ、それへと――小さな声で――対案を提示することに生きた人だったのだ。九鬼が、祇

園から京大の講義に通っていたというよく知られたエピソードは――真偽のほどはともかく――彼がそのどちらにおいて居心地よく感じていたかを物語って余りある。これは、美的にも倫理的にも、彼の生の感情を表現するエピソードだっただろう。その意味では、彼が、京大などという、日本の哲学界の本丸のような所に職を得たことは、不幸だったと言うしかない、との感想が浮かぶ。三木清や林達夫を追い出した京都大学（の田邊元）が、よく九鬼周造を大目に見たものだというのも、抱かすにはいられない感慨である。（西田の声は、それほどにも絶対だった、ということか。もつとも、西田自身も、後には九鬼への評価を下げたようだが。）もう少し社会的な観点から、林達夫が興味深いコメントを残しているが、あるいは的を射ているのかもれない。

規準・正典からの逸脱、という論点は、もともと美学に由来する論点であり、倫理学的なものとは言い難い。そのため、九鬼は、これを「いき」概念の内包の中に加え入れることができなかつたのかもしれない。九鬼は、その優男の風貌のせいで、反逆児の気配を漂わすことはいささかもないけれども、その実は、enfant terribleである。それは、正系の権化のような和辻哲郎と並べ比べると、歴然としている。

そもそも、九鬼が、「媚び」という言葉で「いき」を規定していること自体が、すこぶる問題含みだ。というのも、それが、「異性の心を（体も？）とらえようとする働きかけ」という意味で用いられているだけであれば、性的には中立的な印象を与えるが、「媚び」にはさらにもう少し特殊な意味合いも伴っていると思われるからだ。そもそも、男が女に「媚び」を売る、ということはあるのか。もちろん、男も、権力者には媚びを売る。ここからわかることは、「媚びる」という言葉が、権力関係を前提していることだ。男と女の場合もそうだ。力の弱い女が、力の強い男に媚びるのであって、その逆は成り立たない。だからこそ、「意気地」ということが意味を持つ。弱い者が示す「反抗」の姿勢こそ、「意気地」に他ならない。

ということとは、この点で、この書は、あからさまにジェンダー論的にかつ権力論的含意を持つ書でもある、ということになる。なにしろ、遊郭文化を持ち上げる書である。言い換えれば、通常であれば不倫として断罪される関係における姿勢の倫理性を浮き彫りにし、それを救い出そうとする試みなのだ。「苦界」とも呼ばれる環境に生きる女性の倫理的姿勢を顕彰する書物なのであり、そのことがうやむやにされるような受け止め、解釈は、そもそも詐欺行為だと「言わざるをえない。『いき』の

構造』は女性論であり、遊郭論（買春論、と言い換えてもよい）である。

その際、九鬼が「媚び」を質量とみなし、「意気地」「諦め」を形相と捉えているのは、常識的ではある。つまり、「媚び」こそマテリアル（質量）であり、「意気地」「諦め」はそれを形相化するもの、と考えるわけだが、そこからしかし、「いき」の実質は、あくまでも「媚び」の側にあると見ることも不可能ではない。その上で、倫理性は、形相の側に帰せられるのであるが。

ところが、第5章の分析になると、「媚び」という側面が背景に退く。というのも、例えば「模様」の話になったりもするからだ。「模様」自体が「媚び」を売る、などということはありえない。あくまでも、ある模様を用いる人が媚びを売ることだ。（もっとも、そう考えると、化粧だって、自らの身体を用いて「媚び」を売る行為だから、その限りで、自然／芸術の二分法は成り立たないことになる。）第5章の論述は、あたかも模様そのものが「いき」でもあるかのように進められるため、倫理学の書ではなく、美学の書でもあるかのような趣を呈して始めてしまうのだ。

「媚び」は、特定の相手的に的を定めて向けられるものなので、

普遍性という特性とは縁がない。(すべての人に媚びる人は、「八方美人」と呼ばれて、蔑まれるだけだろう。) 善い行為とは、いつでも、どこでも、誰に対しても行われねばならない行為(相手を選ばない行為)だろうから、「媚び」は「八方美人」を評価するのでない限り「善い行為」とは見なされえない。つまり、道徳的行為ではない。ただし、「よい結果」を帰結する、という意味でなら、「よい(上首尾な)行為」と見なされうるとしても、なので、「いき」の構造が倫理学の書であるとは言っても繰り返しになるがあくまでも逆説的に、そうなのだ。(健全な夫婦生活の倫理を説くのであれば、何の驚きもない。それは、和辻にならとても似合いそうだ。)

それにもとどまらない、九鬼が「いき」を顕彰する時、それは、結婚のみならず、(健全な)恋愛にすら対置されているのだ。

「いき」は安価なる現実の提立を無視し、実生活に大胆なる括弧を施し、超然として中和の空気を吸いながら、無目的なまた無関心な自律的遊戯をしている。(…) 恋の真剣と妄執とは、その現実性と可能性によって「いき」の存在に悖る。「いき」は恋の束縛に超越した自由なる浮気心でなければならぬ。」(22)

遊郭の倫理、浮気心の倫理は、自由の倫理であるとされる。異形であることに変わりはない。

【8】 マジョリティ文化拒否の書

この書物は、日本のマジョリティ文化―和辻哲郎が代表しようとしたもの―に対する拒否宣言の書として読まれてこそ、その面目を発揮する。文化文政の江戸の遊郭という特殊社会にひっそりと咲き、その後、自らマジョリティになることはなく、そもそもその可能性すらなかったような倫理的姿勢を顕彰する書物。そして、その特性は、九鬼周造という人、その哲学的思考にも当てはまるものだっただろう。京都大学の哲学科などというメインストリームに身を置いて、彼は、終始、居心地悪く感じていたに違いない―結婚制度というものに、違和感を抱き続けていただろうと同じように。

しかし他方で、九鬼は、西洋文化、西洋哲学というメインストリームに一人対峙せねばならない人でもあった。日本民族、日本文化、日本哲学を背負って立つという心意気(意気地)から自由でありえなかったのだろう。そのために「いき」が「わが民族存在の自己開示として把握」(95)されうる、されねばならない、などという、迷路に迷い込むことにもなったのだ。⁸⁾

【注】

- (1) 宮野真生子「日常・間柄・偶然―九鬼周造と和辻哲郎」、『現代思想』2017年1月臨時増刊号「九鬼周造 偶然・いき・時間」、90頁。
- (2) 宮野真生子『言葉に出会う現在』、ナカニシヤ出版2022年、60頁。
- (3) 『「いき」の構造』からの引用は、『九鬼周造全集第一巻』（岩波書店、1981年）による。
- (4) それに対して、バリ滞在時に執筆された『「いき」の構造』準備稿である「「いき」の本質」では、もう少し簡易に「自己に対して異性を置き、自己と異性との間に一種の関係をつける二元的立場である」と書かれている。（『九鬼周造全集第一巻』93頁）
- (5) 坂部恵『不在の歌―九鬼周造の世界』TPSブリタニカ、1990年、93頁。
- (6) 従って、『「いき」の構造』を母と（二人の）父に対する追慕の書として解釈しようとする坂部の提案には、家族制度への違和感を表わすはずのこの書を再び「幸せでもありえた家族」の物語に回収しようとする、いかにもありがちな試みとして、否、と言わざるをえない。
- 『「いき」の構造』という真にユニークな書物が、異郷にあって故郷を想い、バリにあって江戸を想い、あるいは、異郷にあって母を想い、異郷にあって二人の「父」を思う、（そして、もちろん、異郷にあって異郷の女を想い、異郷にあって故郷の女を想う）、周造の内面にはられた幾層にも重層的な二元の邂逅の緊張に支えられて初めて魅力あふれる作品たりえている」（坂部恵『不在の歌 九鬼周造の世界』104頁）
- (7) 『遊び』のわからないのが、（田辺）先生のいいところでもあり、またダメなところでもあったが：僕たちが卒業したあとの話だが、同僚に『「いき」の構造』の九鬼周造がいたが、この人は阿部次郎や小宮豊隆たちと同じく江戸末期的な「狭斜の巷」の「あそび」しか知らな

い人だから、僕たち新種族とは全く違った旧種族だったわけで、わりと田辺さんの響きをかわなかったのかもしれない。（林達夫・久野収『思想のドラマトゥルギー』平凡社、1974年、166頁）

(8) なお、『九鬼周造全集第一巻』に付された「譯文篇」中の「日本の事」に含まれる「芸者」と題する文章にはこう書かれている。「彼女たちの理想は、倫理的であると同時に美的な「いき」と呼ばれているもので、逸楽と気品の調和した統一である。」（『九鬼周造全集 第一巻』455頁）